彭曉『周易参同契分章通真義』訳注（一）

江波戸　亙

【凡例】

※本稿は、五代後蜀・彭曉（号は真一子）による『周易参同契』（以下、『参同契』）注釈である、『周易参同契分章通真義』（以下、『通真義』）の訳注である。本訳注は、《原文》《校異》《訓読》《語釈》《通釈》の順で並ぶ。通釈中に［　］を附した箇所は訳者による補注である。底本には、今井宇三郎『周易参同契分章通真義校本』（『東京教育大学文学部紀要』第十一輯、一九六六年）所載の正統道蔵本（宮内庁所蔵・正統十年刊行本）を用いた。

※底本と他の主たる『参同契』注釈との校異はすでに今井校本によって行われているが、四庫全書本『通真義』のみ、対校に用いられていない。そこで、校異には底本と四庫全書本との異同のみを示した。その際は煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類は適宜割愛した。

※『参同契』本文の解釈・訳出は、『通真義』の解釈に従って行った。『通真義』からの引用は、章数のみを記した。また、彭曉のもう一つの著作である『還丹内象金鑰匙』（以下、『金鑰匙』。『雲笈七籤』（HY1026）巻七十所収）も積極的に参照した。

※我が国における『参同契』訳注として、鈴木由次郎『周易参同契』（明徳出版社、一九七七年）がある。ただし

鈴木訳注は、元・兪琰『周易参同契発揮』、及び『周易参同契釈疑』の解釈に基づいているため、『通真義』の解釈に従う本稿とは、自ずからその『参同契』解釈は異なる。

※漢字表記は、人名・書名など一部を除いて、新字体とした。

※『道蔵』所収の文献は、『道蔵子目引得』（哈佛燕京学社引得２５）の番号に従い、（ＨＹ〇〇）と示した。

周易参同契分章通真義序

《彭曉序・１》

（校１）序曰、按（１）神仙伝、真人魏伯陽者、（２）会稽上虞人也。世襲（校２）（３）簪裾、（校３）唯公不仕、修真潜黙、養志（４）虚无、博贍文詞、通諸（５）緯候、恬惔守素、（校３）唯道是従、毎視（６）軒裳如糠粃焉。不知師授誰氏、得（７）古文龍虎経尽獲妙旨、乃約周易（校４）撰（８）参同契三篇。又云未尽纎微、復作（９）補塞遺脱一篇、継演丹経之玄奥。所述多以寓言借事、隠顕異文。密示（１０）青州徐従事、徐乃隠名而註之。至（１１）後漢孝桓帝時、公復伝授与（１２）同郡淳于叔通、遂行于世。

《校異》

（校１）四庫全書本は「序曰」の二字を欠く。
（校２）四庫全書本は「簪裾」を「簪琚」に作る。
（校３）四庫全書本は「唯」を「惟」に作る。
（校４）四庫全書本は「撰」を「譔」に作る。

《訓読》

序に曰く、神仙伝を按ずるに、真人魏伯陽は、会稽上虞の人なり。世よ簪裾（しんきょ）を襲ふも、唯だ公のみ仕へず。真を修め潜黙し、志を虚无に養ひ、博く文詞を贍て、諸もろの緯候に通じ、恬淡にして素を守り、唯だ道のみ是れ従ひ、毎に軒裳を視ること糠粃の如し。誰氏に師授せらるかを知らざれども、古文龍虎経を得て尽く妙旨を獲、乃ち周易に約して参同契三篇を撰す。又未だ纖微を尽くさずと云ひて、復た補塞遺脱一篇を作り、継で丹経の玄奥を演ぶ。述ぶる所は多く以て言に寓し事に借り、隠顕 文を異にす。密かに青州の徐従事に示し、徐は乃ち名を隠して之に註す。後漢孝桓帝の時に至りて、公復た伝授して同郡の淳于叔通に与へ、遂に世に行はる。

《語釈》

（１）神仙伝…　本節で彭曉が記す魏伯陽伝は、後世様々な文献（晁公武『郡斎読書志』・朱熹『周易参同契考異』・四庫提要など）に引かれ、魏伯陽伝の一つの定型となっている。しかし以下の語釈で示す通り、この魏伯陽伝

は、現存の『神仙伝』（『太平広記』・『雲笈七籤』などに所収のもの）と多くの点で食い違っていることに注意が必要である。

（2）会稽上虞…　現在の浙江省紹興市の一部。なお、現存の『神仙伝』には「魏伯陽者、呉人也」とある。

（3）簪裾…　かんざしと衣のすそ。官服。官僚の家の比喩。

（4）虚无…　道。『管子』心術上「虚無無形謂之道」、『淮南子』精神訓「虚無者、道之所居也」。

（5）緯候…　七緯と尚書中候。緯書の総称。

（6）軒裳…　貴人の車と着物のすそ。高貴な位の比喩。

（7）古文龍虎経…　『参同契』の前身とされる煉丹文献。現在『道蔵』には二種の『龍虎経』注釈（HY994・995）が収められている。しかし早くから、『龍虎経』は『参同契』に依拠して制作された偽書ではないか、という疑いが持たれてきた。実際にその来歴には不審な点が多く、例えば、『龍虎経』の名が最も早く確認できる唐代のいくつかの文献においては、『龍虎経』は本節で彭曉が魏伯陽の弟子として挙げている徐従事の作とされているなど、その出自が非常に不安定な文献である。詳しくは、拙稿「『古文龍虎経』の来歴とその受容」の第一章（『東洋の思想と宗教』第三十一号、二〇一四年）、及び「『周易参同契分章通真義』覚書」の第三章（二）（『論叢　アジアの文化と思想』第二十三号、二〇一四年）を参照のこと。なお、現存の『神仙伝』には、『古文龍虎経』の名は全く見えない。

（8）参同契三篇…　『参同契』三篇の作者については諸説存在するが、彭曉は、「『参同契』三篇（及び「五相類」一篇の計四篇）は、全て魏伯陽の作である」との立場を採り、魏伯陽・徐従事・淳于叔通がそれぞれ

一篇ずつを作成したという説を強く否定している。八三章彭注「曉按、諸道書或以真契三篇、是魏公与徐従事、淳于叔通、三人各述一篇、斯言甚誤。且公於此自述五相類一篇云、今更撰録、補塞遺脱。則公一人所撰明矣」。また、現存の『神仙伝』には「伯陽作参同契五行相類、凡三巻」（『太平広記』所収本）、「伯陽作参同契五相類、凡二巻」（『雲笈七籤』所収本）などとあり、書名・巻数の点で本節の記述とは異なっている。

（9）補塞遺脱一篇…　この「補塞遺脱」篇は、いま八四章に収められている。その彭注に「魏公先述参同契三篇、鋪舒寥廓、未備纖微。且復撰五相類一篇補塞遺脱、則乾坤陰陽五行終始之情性尽矣、還丹首尾法象之大旨備矣」とある。つまり「補塞遺脱」篇は、本来は「五相類」という篇名であり、『参同契』の「遺脱を補塞する」べく制作された篇である。

（10）青州徐従事…　「青州」とは、現在の山東省濰坊市の一部。「従事」とは、州の刺史の属官を指す官名。徐従事は本節では魏伯陽の弟子とされているが、彭曉以前の諸文献においては基本的に魏伯陽の師とされている。

（11）後漢孝桓帝…　一四六～一六七年在位。

（12）同郡淳于叔通…　『真誥』（HY1010）に「淳于斟、字叔顯。……斟、会稽上虞人」とあり、これに陶弘景が「易参同契云、桓帝時、上虞淳于叔通受術于青州徐従事」（巻十二・稽神枢第二）と注している（陶弘景による『易参同契』の引文は現行『参同契』には見えない）。ここでは魏伯陽の名は記されておらず、また、魏伯陽が淳于叔通に『参同契』を伝授したという彭曉の記述とも食い違っている。

《通釈》

序に言う。神仙伝によれば、魏伯陽真人は会稽上虞の出身である。代々官僚を世襲していたが、魏公だけは仕官せず、真［の道］を修めて沈潜し、虚無［なる道のうちに］志を涵養し、書物を博覧して、諸々の緯書に通暁し、さっぱりとして質素を旨とし、［無為自然の］道にのみ従って、立派な車や官服をつねに糠や粃のように見下していた。誰から伝授されたかは不明であるが、『古文龍虎経』を得てその霊妙な宗旨をあますことなく理解し、そこで『周易』と絡めて『参同契』三篇を撰述した。また、それでも委曲を尽くし切れていないとして、さらに「補塞遺脱」一篇を作り、丹経の霊妙な奥義を敷衍したのである。［『参同契』の］言説はその多くが寓言や比喩であり、密やかな部分と明らかな部分があって一様な文ではなかった。［魏伯陽はこれを］密かに青州の徐従事に示し、そこで徐従事は自らの名を隠してこれに注を加えた。後漢の桓帝の世に至ると、魏公は再び［『参同契』を］同郡の淳于叔通へ伝授し、こうして［『参同契』は］世に知られることとなった。

《彭曉序・2》

公(校1)撰参同契者、謂修丹与天地造化同途、故托易象而論之。莫不仮(1)借君臣以彰内外、(2)叙其(校2)離坎直指汞鉛、(3)列以乾坤奠量鼎器。(4)明之父母係以始終、合以夫婦拘其(校3)交媾、譬諸男女顕以滋生。析

以陰陽導之(校4)反復、示之晦朔通以降騰、配以卦爻形(校5)於変化、(5)随之斗柄取(校6)以周星、分以晨昏昭諸刻漏。故(6)以乾坤為鼎器、(7)以陰陽為隄防、(8)以水火為化機、(9)以五行為輔助、(10)以真鉛為薬祖、以玄精為丹基、(11)以(校7)離坎為夫妻、(12)以天地為父母。(校8)互施八卦、驅役四時、(13)分三百八十四爻循行火候、運(14)五星二十八宿環列鼎中、乃得(15)水虎潜形寄庚辛而西転、火龍伏体逐甲乙以東旋。

《校異》

（校1）四庫全書本は「撰」を「譔」に作る。

（校2）四庫全書本は「離坎」を「坎離」に作る。

（校3）四庫全書本は「交媾」を「交姤」に作る。

（校4）四庫全書本は「反復」を「反覆」に作る。

（校5）四庫全書本は「於」を「以」に作る。

（校6）四庫全書本は「以」を「其」に作る。

（校7）四庫全書本は「離坎」を「坎離」に作る。

（校8）四庫全書本は「互」を「亘」に作る。

《訓読》

公の参同契を撰するは、修丹は天地の造化と途を同じくするを謂ふ、故に易象に托して之を論ず。君臣に仮借して以て内外を彰かにし、其の離坎を叙べて汞鉛を直指し、列ぬるに乾坤を以てして鼎器を奠量し、之

が父母を明らかにして係くるに始終を以てし、合するに夫婦を以てして其の交媾を拘へ、諸を男女に譬へて顕はすに滋生を以てし、析くるに陰陽を以てして之が反復を導き、之が晦朔を示して通ずるに降騰を以てし、配するに卦爻を以てして変化に形し、之が斗柄に随ひて取るに周星を以てし、分くるに晨昏を以てして諸を刻漏に昭らかにせざるは莫し。故に乾坤を以て鼎器と為し、陰陽を以て隄防と為し、水火を以て化機と為し、五行を以て輔助と為し、真鉛を以て薬祖と為し、玄精を以て丹基と為し、離坎を以て夫妻と為し、天地を以て父母と為す。互ひに八卦を施し、四時を驅役し、三百八十四爻を分かちて火候に循行し、五星二十八宿を運らせて鼎中に環列すれば、乃ち水虎形を潜めて庚辛に寄りて西転し、火龍体を伏して甲乙を逐ひて以て東旋するを得。

《語釈》

（1）借君臣以彰内外…　「内外」とは、煉丹に用いる鼎器の内部と外部。「君臣」とは、「君」が鼎器の内部、「臣」が外部を指す。彭曉によれば、鼎器の内部は天地の縮図であり、鼎器の外部における天地自然・日月星辰の運行と、鼎器の内部における陰陽五行の運行は密接に対応している（十章彭注「故鼎室中、乃自是一天地也。……則知一鼎中造化、一一明象天地運動、発生万類也」）。それ故、鼎内（君主）が乱れていれば鼎外（臣下）からの貢献が得られず、また鼎外（臣下）が乱れていればその害は全て鼎内（君主）に跳ね返ってくるという（十九章彭注「若鼎内応而外不専、良由国君驕溢、則四方貢輸不入。臣下邪佞、致使時刻有差、弦望虧盈、晦朔吝咎、皆帰過于主。主、即金精、土徳、神室也。臣、即五行、六律、精気也」）。そこで、鼎外における自然の運行に則って作業を行えば、

我々が目視できぬ鼎内における煉丹も自ずから適切に進行するのである。二章彭注「則外交陰陽之符、内生龍虎之体」、六章彭注「不失鼎内四時、不虧象中寒暑、則其丹必成矣。……是故修金液還丹、若非取法象天地造化以自然之情、則无所成也」、十六章彭注「一一不失日月星辰行度之数、則鼎内依四時生産万物神精也。運火之士、得不慎乎」などを参照。

（2）叙其離坎直指汞鉛…　「離坎」とは、『易』の離卦☲と坎卦☵。二陽一陰である離卦☲は火・南方に配当され陽的な側面を持ち、二陰一陽である坎卦☵は水・北方に配当され陰的な側面を持つ。その一方で、離卦の本質は陰、坎卦の本質は陽である（これは、『易』繫辞下伝「陽卦多陰、陰卦多陽」に基づく、集団の中では少数が多数を支配・規定するという考え方である）。このように、離卦・坎卦の二卦は陰陽における二重性を備えているために、煉丹では重要なシンボルとして用いられる。また、「汞」とは、みずがね、水銀のこと。煉丹は基本的に汞と鉛の結合によって完成するが、これはしばしば離卦と坎卦の交合によって象徴される。

（3）列以乾坤奠量鼎器…　「奠量」とは、定めはかるの意。一章彭注に「一気既形、二儀斯析、然後有乾坤焉、有陰陽焉、有三才五行焉、有万物衆名焉。故配乾坤為天地之紀綱」とある通り、乾坤、すなわち天地が定まって初めて、その間に万物が生じた。これに準えて煉丹では、乾坤に象って鼎器（「既済鼎器」。後掲語釈「以水火為化機」を参照のこと）を規定し、その内部に万物を生じさせるのである。七章彭注「天地設位者、以其既済鼎器法象乾坤也。易行乎其中者、乃陰陽坎離符火運行其中也」。

（4）明之父母係以始終…　「父母」とは、乾卦・坤卦を指す（『易』説卦伝「乾天也、故称乎父。坤地也、故称乎母」）。「始終」とは、十干における最初である甲・乙と、最後である壬・癸のこと。十干を八卦に配当する

「納甲」においては、乾卦は甲・壬、坤卦は乙・癸に配当される。そこで乾坤の二卦は、十干の始終を統べ括るものとされるのである。十五章に「壬癸配甲乙、乾坤括終始」とあるのを参照のこと。また納甲法については、十三～十五章にまとまった記述が見えるので、そこで詳説する。

（5）随之斗柄…　「斗柄」とは、北斗七星の柄の部分。この斗柄の回転に従って、五星二十八宿などの他の星も回転する。十七章彭注「復随斗柄経歴十二辰上、順五星于四七之間（四七、乃二十八宿也）」。

（6）以乾坤為鼎器…　乾坤に象って鼎器を定めること。前掲「列以乾坤奠量鼎器」語釈を参照。

（7）以陰陽為隄防…　陰陽の気を適切に調節することで、鼎内に生じた真精の流出を防ぐ。二六章彭注「鼎内復有枢轄固済、閼絶奸邪、以防真気走失。……雖固密隄防、得神気満于室内、又須調運陰陽交互施功、将以留連真精而成変化。如運火符差忒、縦有真精在内、亦復飛走不住」。

（8）以水火為化機…　「水火」とは、煉丹を行う鼎器の上部に備えられた水と、下部に備えられた火。「化機」とは、変化のしくみ。つまり、絶え間なく巡る鼎器の水と火が、鼎内におけるあらゆる変化を引き起こす、の意。『参同契』においては、『易』の卦によってこれを表象する。例えば、このような上に水、下に火を設けた鼎器は、その構造を離☲（火）下・坎☵（水）上の既済卦䷾に擬えて、「既済鼎器」と呼ばれる。鼎器の本体は天地たる乾坤を象徴し、その内に乾坤の作用たる坎離（水火）が巡るのである。二二章彭注「水火既済、乾坤之謂也。水在上常静、無為而処陰、不以察求也。火在下常動、運転経歴十二辰内、其用不休也」、七章彭注「天地設位者、以其既済鼎器法象乾坤也。易行乎其中者、乃陰陽坎離符火運行其中也。……坎離二用無爻位者、謂外施水火、運転動静無常。故周流六虚、往来上下無

常位也。或隠、或顕、或用、或潜、更為変化之宗、互作生成之母」。

（9）以五行為輔助…　五行の気によって、鼎内における煉丹の完成を補助する。四一章彭注「然金丹之要、全在鉛火二字。鉛火則水火也、為還返之祖宗。其余五行気候、皆輔助而成功」。

（10）以真鉛為薬祖、以玄精為丹基…　「真鉛」とは、煉丹の最終段階において、真汞を産出・保持・養育するための根基となる物質のこと。「黄芽」とも。真汞が果実であれば、真鉛は根とされる。八六章彭注「凡修金液還丹、当須先認根株、方得薬生華葉、而果実垂布也。……但認得真鉛為薬根株、則自然薬生真汞如果之実」、七二章彭注「河上姹女者、真汞也。見火則飛騰、如鬼隠龍潜、莫知所往。或擬制之、須得黄芽為母、養育而存也。黄芽、即真鉛也」などを参照のこと。一般に煉丹の最終目的は鉛と汞の結合であり、彭曉もその枠組は踏襲しているが、彼の所謂「鉛」は、丹薬の材料の片割れであるのみならず、「汞」を産出・保持・養育する母胎であるため、煉丹において中心的な役割を果たしているのは常に鉛の方であり、真鉛それ自体が最終目的物とも言える。

また、「玄精」とは、天地に先んじて生じ、万物を生み出した原初の一気のこと。「元精」「（玄妙）真一之精」などとも。十六章彭注「元精者、是鼎中神霊真精、天地之元気也。搏之不得、視之不見、而能潜随化機、生成万物」。

ここで注意すべきは、この「真鉛」と「玄精」が同一のものであることである。『金鑰匙』黒鉛水虎論には次のようにある。

夫黒鉛水虎者、是天地妙化之根、無質而有気也。乃玄妙真一之精、為天地之母、陰陽之根、日月之

宗、水火之本、五行之祖、三才之元。万物頼之以生成、千霊稟之以舒慘。至於高天厚地、洞府仙山、玄象霊官、神仙聖衆、風雨晦朔、春夏秋冬、未有一物不因鉛気産出而成変化也。……即是真一之精、聖人異号為真鉛、則天地之根、万物之母是也。……黒鉛者非是常物、是玄天神水、生於天地之先、作衆物之母、此真一之精元、是天地之根。能於此精気中、産生天地五行万物。

また、二五章彭注にもこうある。

「先天地生、巍巍尊高」者、謂真鉛未有天地混沌之前、鉛得一而先形、次則漸生天地陰陽五行万物衆類。故鉛是天地之父母、陰陽之本元。蓋聖人採天地父母之根而為大薬之基、聚陰陽純粋之精而為還丹之質。故殆非常物之造化也。而修丹之始、則以天地根為薬根、以陰陽母為丹母。

このように彭曉は、真鉛＝玄精を生成論の頂点に据え、「鉛一元論」とも呼ぶべき世界観を構築している。つまり彼にとって「鉛」とは、「道」に等しい原初の存在であると同時に、煉丹において獲得すべき最終目的物でもあると言えよう。拙稿「彭曉の煉丹理論――五行の変化に着目して――」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五八輯、二〇一二年）の「おわりに」を参照のこと。

（11）以離坎為夫妻…　『易』説卦伝に「乾天也、故稱乎父。坤地也、故稱乎母。震一索而得男、故謂之長男。巽一索而得女、故謂之長女。坎再索而得男、故謂之中男。離再索而得女、故謂之中女。艮三索而得男、故謂之少男。兌三索而得女、故謂之少女」とあり、八卦において父母たる乾坤が交接することで残りの六卦が生じたことが記されている。乾卦・坤卦を父母とすれば、離卦は次女、坎卦は次男。さらに『参同契』においては、この離卦が妻、坎卦が夫であり、この夫妻の交合によって、汞と鉛の結合が

象徴される。四四章彭注「坎男離女、是南北之夫妻」、「明鏡図」第八環「離女坎男交媾、共生真砂真汞而成還丹也」。前掲語釈「叙其離坎直指汞鉛」も参照。

（１２）以天地為父母…　天地、すなわち乾坤を父母と見なすこと。一章本文・彭注「乾坤者易之門戸、衆卦之父母」。乾坤が父母とされることについては、前掲語釈「以離坎為夫妻」所引の『易』説卦伝を参照のこと。

（１３）分三百八十四爻循行火候…　「三百八十四爻」とは、『易』の卦における爻の総数（六十四卦×六爻）。「火候」とは、煉丹を行う際の火加減。『参同契』は『易』の三百八十四爻によって、煉丹における正しい火加減を指示する。十章本文「易有三百八十四爻」、同彭注「約六十四卦、依三百八十四爻。據爻摘符火、随進退」。

（１４）五星二十八宿…　前掲語釈「随之斗柄」を参照。

（１５）水虎潜形寄庚辛而西転、火龍伏体逐甲乙以東旋…　前述の「離坎」と同様に、「虎」は鉛、「龍」は汞の比喩。また、「庚辛」「西」は五行では金に当たり、「甲乙」「東」は木に当たる。つまり、虎が水から金へと変化し、龍が火から木へと変化することを示す。なお、五行相生においては、金は水へ、木は火へと変化するのが通例であるが、このように彭曉は、五行相生を逆転させた変化、すなわち「五行顛倒」を説き、これを重要視する。この「五行顛倒」の詳細とその意義については、拙稿「彭曉の煉丹理論――五行の変化に着目して――」の第四章を参照のこと。

《通釈》

魏公が『参同契』を撰述するにあたっては、煉丹を修める方法が天地の造化の道理と一致していることを述べた。そこで［天地造化の道理を象徴している］『易』の象にこと寄せて、煉丹を論じたのである。それはすべて、君臣の関係に喩えて［鼎器の］内部・外部の連関を明らかにし、離卦・坎卦によって汞・鉛の性質を端的に示し、乾卦・坤卦の配列によって鼎器をはかり定め、父母（乾坤）の性質を明らかにして［十干の］始終に関連させ、夫婦の合体によってその交接を把握し、これを男女の関係に喩えて［万物の］生育を明らかにし、陰陽［の道理］の分析によってその反復［の規則］を導き出し、［月の］晦朔を示して［卦爻の］昇降によって［道理を］通じさせ、［様々な事象に］卦爻を配当してその変化を表象し、北斗の運行に従うことで巡る星々［が示す時間の推移の規範］を把握し、昼夜を分割してそれを刻漏（水時計）で明示した。それ故、乾坤によって鼎器を定め、陰陽［の調節］によって［鼎内の真精の流出を防ぐ］堤防とし、［鼎器の上下に備えた］水火によって［鼎内における］変化を引き起こし、五行［の気］によって［鼎内における煉丹の完成を］補助し、真鉛を［真汞という果実を実らせるための］薬祖とし、［万物を生み出した原初の一気たる］玄精を煉丹の基盤とし、離卦・坎卦を夫妻と見なし、［乾卦坤卦によって表象される］天地を父母と見なしたのである。八卦を相互に作用させ、四時［の気候］を利用し、［『易』の］三百八十四爻を明らかにしてこれに従って［適切な］火候を行い、五星二十八宿［が示す天］の運行を鼎器の内部で循環させれば、水たる虎（鉛）はその姿を隠しつつ庚辛・西方（＝金）へと遷移し、火たる龍（汞）はその体を伏しつつ甲乙・東方（＝木）へと遷移することができるのだ。

《彭曉序・3》

(1)易曰、聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜。公因取象焉。(2)非天下之至通、其(校1)孰能与於此哉。乃見鑿開混沌、擘裂(3)鴻濛、(4)径指天地之霊根将為薬祖、明視陰陽之聖母用作丹基。泄一気変化之元、漏大冶生成之本。非天下之至達、其孰能与於此哉。其或定刻漏、分晷時、簇陰陽、走神鬼、蹙(5)三千六百之正気、回(6)七十二候之要津。運(7)六十四卦之(8)陰符、(9)天関在(校2)掌、鼓(10)二十四気之(8)陽火、(9)地軸由心。天地不能匿造化之機、陰陽不能蔵(校3)(11)亭育之本、致使神変无方、化生純粋。非天下之至明、其孰能与於此哉。

《校異》

(校1) 四庫全書本は「孰」を「誰」に作る。

(校2) 四庫全書本は「掌」を「手」に作る。

(校3) 四庫全書本は「亭育」を「亭毒」に作る。

《訓読》

易に曰く、聖人以て天下の賾を見る有りて、其の形容に擬へ、其の物宜に象ると。公因りて象を焉より取る。天下の至通に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

乃ち混沌を鑿開し、鴻濛を擘裂するを見て、天地の霊根を径指して将て薬祖と為し、陰陽の聖母を明視して用て丹基を作る。一気変化の元を泄らし、大冶生成の本を漏らす。天下の至達に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

其れ或ひは刻漏を定め、晷時を分かち、陰陽を簇め、神鬼を走らせ、三千六百の正気を蹙め、七十二候の要津を回らす。六十四卦の陰符を運らせ、天関掌に在り、二十四気の陽火を鼓し、地軸心に由る。天地 造化の機を匿すこと能はず、陰陽 亭育の本を蔵すこと能はず、神変无方にして化生純粋ならしむるを致す。天下の至明に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

《語釈》

（1）易曰～…　『易』繫辞上伝「聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜。是故謂之象」。

（2）非天下之至通、其孰能与於此哉…　『易』繫辞上伝に、『易』の霊妙な性質を讃えて「非天下之至精、其孰能与於此」「非天下之至変、其孰能与於此」「非天下之至神、其孰能与於此」と述べることをふまえる。以下に五箇所、同型の文あり。

（3）鴻濛…　無形、混沌のさま。『淮南子』精神訓「古未有天地之時、惟像無形、窈窈冥冥、芒芠漠閔、澒蒙鴻洞、莫知其門」。

（4）径指天地之霊根将為薬祖、明視陰陽之聖母用作丹基…　前節「以真鉛為薬祖、以玄精為丹基」と同義。すなわち、「天地之霊根」「陰陽之聖母」はともに真一の玄精たる真鉛を指す。

（5）三千六百之正気…　三千六百時、すなわち十ヶ月分の陰陽の気を鼎中に集め、丹を作成すること。『参同契』においては、煉丹に必要な期間を「一年」とした場合、うち二ヶ月は丹の沐浴のために火を止めるので、実際に火を用いるのは十ヶ月である（この十ヶ月とは人間の出産期間に擬えたもの）。一日は十二時、一月は三百六十時であるため、十ヶ月は「三千六百」時となる。『金鑰匙』紅鉛火龍訣「凡一月三百六十時、一年十二月合四千三百二十時、象四千三百二十年。内卯酉二卦息符、一年内合数共除出六十日、両計七百二十時、象七百二十年。汞内胎符火数、実十個月、計三千六百年」。

（6）七十二候…　一候は五日。よって「七十二候」は三百六十日、つまり一年にあたる。

（7）六十四卦…　一年三百六十日を指す。乾坤坎離の四卦を除いた六十卦、計三百六十爻によって、一年三百六十日を象る。『金鑰匙』紅鉛火龍訣「朝暮各占一卦、又係六十卦、計三百六十爻。復象一年三百六十日也」、二章彭注「乾坤坎離四卦為薬之父母、枢轉鼎器、則非昼夜之数」。

（8）陰符／陽火…　煉丹における火候（火加減）を示す術語。それぞれ「退陰符」「進陽火」とも。煉丹においては、春夏秋冬のリズムを模して、春夏にあたる前半期間には「陽火」を用い、秋冬にあたる後半期間には「陰符」を用いる。六章彭注「自子丑寅為春、卯辰巳為夏、陽火候也。午未申為秋、酉戌亥為冬、陰符候也。乃於十二辰中運其火符、応此四時五行」。

（9）天関在掌／地軸由心…　「天関」「地軸」は、天地それぞれの回転の枢軸（『太上三洞神咒』（HY78）巻九「天関左転、地軸右奔」）。つまり、「天地の枢軸すら手中に収め、思いのままにする」の意。なお、「天関」について、『洞真三天正法経』（『無上秘要』（HY1130）巻六「劫運品」所引）に「天関在天西北之角、与斗星相

御。北斗七星、則天関之綱柄」とある。

（１０）二十四気…　二十四節気とも。一気は三候、十五日。よって「二十四気」は三百六十日、すなわち一年にあたる。つまり、本節の「三千六百之正気」「七十二候」「六十四卦」「二十四気」は、全て一年という期間を言い換えたものである。また、「六十四卦」「二十四気」が共に一年を指し、また「陰符」と「陽火」、「天関在掌」と「地軸由心」が対応しているため、本節「運六十四卦之陰符、天関在掌、鼓二十四気之陽火、地軸由心」は互文として解した。

（１１）亭育…　安定させ、育む。『老子』通行本五一章「故道生之、徳畜之、長之育之、亭之毒之、養之覆之」。なお、四庫全書本は「亭毒」に作り、その場合は「安定させ、手厚くする」の意となる。

《通釈》

『易』繫辞上伝に「聖人以て天下の賾を見る有りて、其の形容に擬へ、其の物宜に象る」という。魏公はこれに因って、『易』から［卦という］シンボルを借用したのである。天下で最も道理に通暁した者でなければ、いったい誰がこれに参与することができようか。

そこで［魏公は］、鴻濛たる混沌を開きかち割って、天地の霊妙な根源（真一の玄精たる真鉛）を端的に示してこれを薬祖とし、陰陽の聖母（真一の玄精たる真鉛）を明らかに洞察してこれを煉丹の基盤とした。［原初の］一気が変化［して万物を生成］する、その大元［の秘密］を［世に］漏らし、大いなる造化が［万物を］生成する、その根本［の秘密］を［世に］漏らしたのである。天下で最高の達人でなければ、いったい誰がこれ

に参与することができようか。

［魏公は、］あるいは刻漏（水時計）［によって時刻］を定め、晷時（日時計）［によって時節］を分かち、陰陽［の気］を集めて、鬼神を使役し、［火を用いる十ヶ月間、すなわち］三千六百時分の正気を［鼎内へと］集約させ、［一年］七十二候の要所にめぐらせた。［一年に配当した］六十四卦・二十四気において陰符・陽火をめぐり奮わせて、天の枢軸をすら手中に収め、地の枢軸をすら思いのままにする。［かくて、］天地はその造化のしくみを秘匿しきれず、陰陽は［万物を］安んじ育むその根本を隠匿しきれず、霊妙な変化はきわまりなく、生育は純粋に行われざるを得ないのだ。天下で最も聡明な者でなければ、いったい誰がこれに参与することができようか。

《彭曉序・4》

（1）契（校1）云、混沌金鼎、（校2）（2）白黒相符。（3）龍馬降精、牝牡襲気。（4）如霜馬歯、似玉犬牙。（5）水銀与姹女同（校3）名、朱汞共嬰児合体。（校4）明分薬質、細露丹形。尽周已化之潜功、大顕未萌之（校5）睽兆。非天下之（校6）至神、其孰能与於此哉。

其有仮借爻象、（校7）寓此事端、不敢（校8）漏泄天機、未忍秘（校9）蔵玄理、是以鋪舒不已、（校10）羅縷再三、欲罷不能、遂成篇軸。蓋欲指陳要道汲引将来、痛彼有生之身竟作全陰之鬼。非天下之至仁、其孰能与於此哉。

復有通徳（6）三光、遊精（7）八極、服（8）金砂而化形質、餌（8）火汞以（校11）錬精魂。故（9）得体変純陽、神生

(10)真宅、落三尸而超三界、朝上清而登上仙。非天下之(校12)至真、其孰能与於此哉。

《校異》

(校1) 四庫全書本は「云」を「曰」に作る。

(校2) 四庫全書本は「白黒」を「黒白」に作る。

(校3) 四庫全書本は「名」を「居」に作る。

(校4) 四庫全書本は「明分」を「分明」に作る。

(校5) 四庫全書本は「睽兆」を「朕兆」に作る。

(校6) 四庫全書本は「至神」を「至誠」に作る。

(校7) 四庫全書本は「寓此」を「寓比」に作る。

(校8) 四庫全書本は「漏泄」を「泄漏」に作る。

(校9) 四庫全書本は「蔵」を「其」に作る。

(校10) 四庫全書本は「羅縷」を「覼縷」に作る。

(校11) 四庫全書本は「錬」を「煉」に作る。

(校12) 四庫全書本は「至真」を「至精」に作る。

《訓読》

契に云ふ、混沌たる金鼎、白黒相ひ符す。龍馬 精を降し、牝牡 気を襲ふ。霜の如きは馬歯、玉の似きは

犬牙、と。水銀と姹女とは名を同じふし、朱汞 嬰児と共に体を合す。明らかに薬質を分かち、細さに丹形を露はす。尽く已化の潜功を周らせ、大ひに未萌の睽兆を顕らかにす。天下の至神に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

其れ爻象に仮借して、此の事端に寓すること有り、敢へては天機を漏泄せざるも、未だ玄理を秘蔵するに忍びず。是を以て鋪舒して已めず、羅縷すること再三、罷めんと欲するも能はず、遂に篇軸を成す。蓋し要道を指陳して将来を汲引し、彼の有生の身の竟に全陰の鬼と作るを痛まんと欲す。天下の至仁に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

復た徳を三光に通じ、精を八極に遊ばせ、金砂を服して形質を化し、火汞を餌して以て精魂を錬ること有り。故に体 純陽に変じ、神 真宅に生じ、三尸を落として三界を超へ、上清に朝して上仙に登るを得。天下の至真に非ざれば、其れ孰れか能く此に与らんや。

《語釈》

（1）契云～…　典拠未詳。「混沌金鼎」から「似玉犬牙」まで、『参同契』の引用と思われるが、現行の『参同契』に一致する一節はそのうち「白黒相符」のみ（六四章「類如鶏子、白黒相符」）。

（2）白黒相符…　「白」は五行の金、「黒」は五行の水。「五行顛倒」（前掲語釈「水虎潜形～」を参照）によって、水たる黒鉛は金たる白金（真鉛）へと変化するが、これによって水の属性が失われるわけではなく、金水が共に「神器」（真鉛）となるために、「白黒相符」という。二三章彭注「白者、金也。黒者、水也。……

白金自水而産、乃為神器、水体不絶、乃金水両情為道枢紐也」、六四章彭注「「白黒相符」者、金水相包也。「縦広一寸」者、以安霊汞也」。

（3）龍馬降精、牝牡襲気…　この一節を互文として解せば、「龍」「牡」は乾卦を、「馬」「牝」は坤卦を指す（『易』坤卦卦辞「利牝馬之貞」、同彖伝「牝馬地類」）。よって、本節は「牡龍・牝馬［たる乾坤］が［陰陽の］精気を布き交わらせる」と訳出した。なお、「牝牡襲気」について、四六章本文に「混沌鴻濛、牝牡相従」として類似の一句が見える。また、七八章彭注には「孤陰不自産、寡陽不自成。須候陰陽相交、牝牡襲気、龍呼虎吸、男成女産」とある。「龍馬」について、『通真義』中の用例としては四一章本文に「龍馬就駕、明君御時」とあるが、これは吉祥を示す乗り物としての龍馬であるので、本節とは無関係であろう。「降精」については、『通真義』中に他の用例は見えない。『洞真九丹上化胎精中記経』（『無上秘要』巻五「人品」所引）に「陰陽既交、二炁降精、化神結胎」とあり、『太上保真養生論』（HY851）に「老君曰、天地降精、陰陽布化、万物以生」とある。

（4）如霜馬歯、似玉犬牙…　「馬歯」「犬牙」ともに、真汞（姹女）の形象の比喩。沸騰する鼎内において、真汞が馬歯や犬牙の如く結晶化しているさまを形容する。真汞は（実際の水銀と同様）、固体・液体・気体の三態が容易に変化する、非常に不安定な物質とされる。「馬歯」については、六八章本文に「化為白液、凝而至堅。金華先唱、有頃之間、解化為水、馬歯琅玕」とある。また、同彭注に「姹女漸長、変化多端。或解化為水、或馬歯琅玕」とある。「犬牙」については、八一章本文に「五色象炫燿兮、変化無常主。潏潏鼎沸馳兮、暴湧不休止。接連重疊累兮、犬牙相錯距。形如仲冬冰兮、闌干吐鍾乳」とある。

（5）水銀与姹女同名、朱汞共嬰児合体…　「水銀」「姹女」「朱汞」「嬰児」は、全て「真汞」の異称。五八章彭注「謂鼎内金得陰気、随水相合変化、滋生姹女水銀也」、七二章彭注「河上姹女者、真汞也。見火則飛騰、如鬼隠龍潜、莫知所往」、六六章彭注「嬰児姹女為真人、浮游於胎中」、二九章彭注「金虎在内、為薬枢機。朱汞青龍、被丙丁朱雀、随時趁逐俱入金胎」などを参照。

（6）三光…　日・月・星辰。

（7）八極…　八方の極地。『淮南子』墜形訓に「天地之間、九州八極」とあり、その高誘注に「八極、八方之極也」とある。

（8）金砂／火汞…　「金砂」は月の魄、「火汞」は太陽の魂。この両者が結合することで煉丹が完成する。七四章彭注「月魄、金砂也。日魂、火汞也」、六三章彭注「「魂魄所居、互為室宅」者、謂日魂月魄相拘於金室之中、為丹根基也」、三九章彭注「日魂起于朔辰、月魄終于晦暮。雌雄相禅、砂汞互生、天地自然、而丹道昭矣」。

（9）得体変純陽…　「無涯の元気」（すなわち、真一の精）によって作られた煉丹を服用することで、濁乱した陰陽の気から構成されている人体を、「純陽真精の形」へと変化させること。これによって服用者の寿命は、天地と等しくなるという。六二章彭注「喩修還丹全因元気而成、是将無涯之元気、続有限之形躯。無涯之元気者、天地陰陽長生真精、聖父霊母之気也。有限之形躯者、陰陽短促濁乱、凡父母之気也。故以真父母之気、変化凡父母之身、為純陽真精之形、則与天地同寿也。」

（10）真宅…　人の精神が帰る場所とされる、太虚の域。『列子』天瑞に「精神者、天之分。骨骸者、地

之分。属天清而散、属地濁而聚。精神離形、各帰其真、故謂之鬼。鬼、帰也。帰其真宅」とあり、その張湛注に「真宅、太虚之域也」とある。

《通釈》

『参同契』にいう、「混沌たる金鼎の中で、白黒［すなわち金水の性質］が符合［して真鉛へと変化］する。牡龍・牝馬［たる乾坤］が［陰陽の］精気を布き交わらせる。霜の如き馬歯、玉の如き犬牙［のように、真汞が結晶化する］」と。水銀と姹女は［実際には］同名のものであり、朱汞と嬰児は一体のものである。［このように魏公は、］薬の性質を明らかに分別し、丹の形態を詳細に表した。すでに明らかな生成変化についてはその隠れた功用をあまねく説き尽くし、未だ明らかならざる［生成変化についてはその］微かな兆しを広く顕示した。天下で最も霊妙な者でなければ、いったい誰がこれに参与することができようか。

［魏公は、『易』の］爻象に仮託して、現象の端々に比喩を用い、天のしくみを敢えて漏らそうとはしなかったが、奥深い道理を秘密にしておくことには忍びなかった。そこで、これをとめどなく敷衍して語り、また再三にわたって詳細に述べつらね、止めようとも止められず、遂にこの書（『参同契』）を完成させたのである。やはり、至要なる道理を開陳することで来たるべき後人を引き立てるため、そして彼らの有限の肉体がついには全陰の鬼へと成り下がることを痛ましく思ったためであろう。天下で最も仁愛なる者でなければ、いったい誰がこれに参与することができようか。

また、その徳を日月星辰にまで通じさせ、その心を八方の極地にまで遊ばせ、［月魄たる］金砂を服用し

てその身体を変化させ、［日魂たる］火汞を服用してその精神を煉り上げる。それ故、その身体は純陽へと変化し、その精神は［太虚の域たる］真宅に生じ、三尸虫を駆除して［欲界・色界・無色界からなる煩わしき］三界から超越し、上清天に朝謁して上仙の位へ登ることができるのだ。天下で最も正しい者でなければ、いったい誰がこれに参与することができようか。

《彭曉序・5》

曉所分真契為章義者、蓋以仮借為宗、上下无準、文泛而道正、事顕而言微。後世議之、各取所見、或則分字而(校1)義、或則合句而箋、不无(1)畎澮殊流、因有(2)妍媸(校2)互起。末学尋究、難便洞明、既首尾之議論不同、在(校3)取捨而是非无的。

今乃分章定句、所貴道理相黏、合義正文、及冀薬門附就。故以(3)四篇統、分(校4)三巻為九十章、以(校5)応陽九之数。名曰分章通真義。復以朱書正文、墨書旁義、而顕然可覧也。上巻分四十章、中巻分三十八章、下巻分十二章。内有(4)歌鼎器一篇。謂其(校6)詞理鉤連、字句零砕、分章不得。故独存焉、以応水一之数(校7)。喩丹道陰陽之数備矣。復(校8)自依約真契、撰明鏡図訣一篇、附于下巻之末。将以重啓真契之戸牖也。曉因師伝授、歳久留心、不敢隠蔽玄文、是(校9)用課成真義。庶希万一貽及後人也。(5)昌利化飛鶴山真一子彭曉序。

《校異》

（校１）四庫全書本は「義」を「議」に作る。
（校２）四庫全書本は「互」を「亘」に作る。
（校３）四庫全書本は「取捨」を「取舎」に作る。
（校４）四庫全書本は「三巻」を「二巻」に作る。
（校５）四庫全書本は「応陽九之数」を「陰陽九」に作る。
（校６）四庫全書本は「詞理」を「辞理」に作る。
（校７）四庫全書本は「数」字の下に「也」字あり。
（校８）四庫全書本は「自」を「次」に作る。
（校９）四庫全書本は「用」を「謂」に作る。

《訓読》

曉の真契を分かちて章義を為す所の者は、蓋し仮借を以て宗と為し、上下 準无し、文泛くして道正しく、事顕らかにして言微かなればなり。後世之を議するに、各おの見る所を取り、或ひは則ち字を分かちて義し、或ひは則ち句を合して箋し、畎澮 流れを殊にすること无からず、因りて妍媸互ひに起こること有り。末学の尋究、洞明に便じ難し、既に首尾の議論同じからず、取捨に在りても是非 的无し。

今乃ち章を分かちて句を定め、貴ぶ所の道理相黏し、義を正文に合し、及びて薬門の附就せんことを冀ふ。故に四篇を以て統べ、三巻に分かちて九十章と為し、以て陽九の数に応ぜしむ。名づけて分章通真義と曰ふ。

復た正文を朱書し、旁義を墨書するを以てして、顕然として覧るべきなり。上巻は四十章に分かち、中巻は三十八章に分かち、下巻は十二章に分かつ。内に歌鼎器一篇有り、謂ふこころは其の詞理鉤連するも、字句零砕にして、分章し得ず。故に独り焉を存して、以て水一の数に応ぜしめ、丹道陰陽の数備はるに喩ふ。復た自ら真契に依約し、明鏡図訣一篇を撰して、下巻の末に附す。将に以て重ねて真契の戸牖を啓かんとするなり。曉 師に因りて伝授せられ、歳久しく心に留むるも、敢へては玄文を隠蔽せず、是に用て真義を成さんことを課(こころ)みる。庶幾はくは万一 後人に貽及せんことを。昌利化飛鶴山真一子彭曉序す。

《語釈》

（1）畎澮…　みぞ、用水路。

（2）妍媸…　美しいことと醜いこと。

（3）四篇…　四篇の内訳は、『参同契』三篇と「補塞遺脱」（「五相類」）一篇。「鼎器歌」彭注「曉所分、参同契并補塞遺脱四篇為九十章、以応陽九之数」。

（4）歌鼎器一篇…　「歌鼎器」（「鼎器歌」）は、「鼎器歌」彭注に「外餘歌鼎器一篇、本在補遺之前」とあることから、本来は「補遺」、つまり「補塞遺脱」篇（現行『通真義』八四章）の前に配列されていたようである。ただし『道蔵』においては「明鏡図訣」と合併の上、『周易参同契鼎器歌明鏡図』（HY1000）と題して独立しており、『通真義』とは別行している。

（5）昌利化…　昌利治。天師道の定めた二十四治のうち、中治八治の第一として挙げられる。『正一炁治

図』（『無上秘要』巻二三「正一炁治品」所引）に「昌利治。上応牛宿。昔李八百初学道処、遊行蜀中諸名山。常日、日出戯於成都市、暮宿於青城山。其山南有一石室、前有三龍門。亦在於広漢郡界」とある。また、『三洞珠嚢』（HY1131）巻七「二十四治品」、及び『雲笈七籤』巻二八「二十四治」にもほぼ同様の記述が見え、その所在について、『三洞珠嚢』は「在広漢郡碩県東西十里、去成都一百五十里」、『雲笈七籤』は「山在懐安軍金堂県東四十里、去成都一百五十里」と記す。

《通釈》

曉（わたくし）が真契（『参同契』）を章分けして注解したのは、やはり［『参同契』が］比喩を主としていて、上下の次第を定める基準が無く、文意は広大にして［そこに述べられる］道は公正であり、事象は明白ながらもその言辞は隠微だからである。後世の人々がこれ（『参同契』）を論じるや、各々が［勝手な］見解を取り上げて、ある者は字句を切り分けて注解し、ある者は字句をつなぎ合わせて注解し、溝は［勝手に切り離されて］必ず流れを分かたれてしまうので、［その解釈も］玉石混淆であった。［このような］浅学たちの学問では、［『参同契』の意を］明確にすることは難しく、前後の議論は食い違い、取捨選択においてもその是非がはっきりしない。

そこでいま［「曉（わたくし）は、」］章分けして各句を定め、重要な道理を相互に関連付け、解釈と正文を合致させ、これによって［『参同契』に説かれる正しい］薬門に寄り添わんと期した。それ故、［『参同契』三篇と『補塞遺脱』一篇の計］四篇を一まとめにした上で、これを三巻・九十章に分かち、これによって［『易』の］

陽九の数に対応させた。これを『分章通真義』と名付ける。また正文は朱書し、その解釈は傍らに墨書することで、［正文と注文の区別が］歴然と見えるようにした。上巻は四十章に分け、中巻は三十八章に分け、下巻は十二章に分けた。［『参同契』］中には「歌鼎器」という一篇がある。思うに、その文辞や道理は連関しているものの、字句が細切れであるので、章分けできない。そこでこれを独立させて、［五行の初たる］水一の数に対応させ、丹道が陰陽の数理を完備していることに擬えた。また、『参同契』に依拠して自ら「明鏡図訣」一篇を撰述し、これを下巻の末尾に附した。これによって『参同契』の門戸をさらに開こうと思う。曉（わたくし）は師から［『参同契』を］伝授され、長年これを心中に留めていたが、その奥深い文章を隠蔽するには忍びず、ここにその真の解釈を作成しようと試みた次第である。願わくは、万が一にも［本書が］後人へ残り伝わらんことを。昌利化飛鶴山の真一子彭曉、序す。